校長のつぶやきⅡ

校長室便り　第４７号　　令和２年１２月１日　山内

〇今日から師走　－２０２０年の授業もあとひと月　「心に残る授業とは」－

〔１２月１日歓声が聞こえる３年生の廊下〕

廊下を歩いていると，悲鳴？歓声？が聞こえてきます。答案返却でしょう。

今日から師走，コロナの影響で本当に色々あった今年もあとひと月です。この時期になると必ず一年を振り返り，「今年の新語・流行語」とか「今年を表す漢字」等が発表されます。新型コロナウイルス感染に関するものが予想されますが，とにかく一日も早い終焉を祈るばかりです。さて，今年の授業もあとわずか。

いつも邪魔にならない程度に廊下から授業を見ていますが，１０月，１１月は公開月間でもあったので様々な授業を実際に教室に入って見せてもらいました。特に気付いたのは「ICT」を使っての授業が目立ちました。「ICT」で生き生きとした岩高生が身を乗り出して授業に参加しているクラスもあれば，うとうとと睡眠学習というクラスもありました。岩高生の大好きな吉田先生のように黒板とチョークを用いた「昭和・平成型」授業と比較してみると非常に面白いです。白色を中心に丁寧に板書された文字に先生オリジナルの図解が書かれたりしていて，岩高生はノート（ハンダウト）にとりながら熱心に話に耳を傾けます。ICT を用いたある授業では，先生がスクリーン前で説明していて，黒板には何も書かれていません。岩高生は，静止画はもちろん，動画に興味津々ですが，ただ見ているだけです。ノートはほとんど白紙のようでした。スクリーンに浮かぶ文字等は印象的ですが，忙しく一瞬で消え，さっさと逃げて行きます。先生に「ノートに書くように」と言われるかよほど自分で積極的に書こうとしなければ，ノートは白紙のままです。「主体的な」学びが必要ですね。

先月，仕事で企業の方や大学の方とお話する機会がありました。双方に共通しているのは「筆記用具で紙に書こうとしない」「スマホに写真，メモで済ましている」といったノート離れの卒業生のことでした。「脱はんこ」と言われていますが，今でも大事な契約や，レポート等は紙に書かなければなりません。日々の授業でのノートとりは，形は古くても簡単には逃げていきません。

ICT はとっても便利で，「教師の板書の手間が省ける」「生徒に楽に理解させる」「時短で効率的」というメリットはあります。ただこのまま「ノート離れ」が進むと確かな力は身につきません。教師として駆け出しの頃，先輩教師の教頭に『「学ぶ」とは「まねぶ」ことから始まる。教師の板書がそのまま生徒のノートにつながる。書き方，色使い等生徒は教師をまねる。子供が大人をまねるのは人間として当たり前のこと。上手くいく・いかない，受ける・受けないは別として，生徒の目の前で生きた言葉を書きながら，生きた言葉を語る教師の姿が生徒の心に残る。』と教わった。昭和の最後の年である。ダミ声の親分のような先輩だったが，３０年以上たっても色あせるどころか今，光り輝く教えだったと思います。

ではこれで今回のつぶやきはお終いです。感染対策しっかりしましょう！